

罪の自覚——その人間学的構造 (二)

内 村 公 義

第二章 人間の存在様式としての罪

前章において筆者は、これまで宗教的・神学的に理解されてきた罪とその自覚の構造を精神病理学的に説明することが方法的に可能であることを示唆し、その解明の手がかりとしてうつ病の罪責体験を取り上げた^①。

メランコリー性の罪責体験はうつ病の部分症状ではなく、そこには「臨床的にうつ病と呼ばれている状態を発現せしめるような人間心性の病態」^②が全的に包含されている。罪責体験において問題になるのは、うつ病者が悔恨の情にさいなまれている個々の行為ではなく、この「人間心性の病態」つまりうつ病者の存在様式そのものである。実際、前章でテレンバッハ^③を引用して指摘したとおり、うつ病者が極く軽微な過失について自分を責めるとき、それは「なにごとかについて自分を責めているという意味での自責」にとどまらず、それと同時に「自己についても自分を責めている」のである。そこでは、「行為の罪と存在の罪、行為の悔いと存在の悔いは、根本において不可分のものである」。人間の存在様式そのものが問題化されるといふ点で、うつ病の罪責体験は宗教的な罪の自覚と類比的である。一例としてルターを取り上げてみよう。ルターはエラスムスの『自由意志についての評論』^④に対する反論として『奴隸意

「志論」⁽⁵⁾を著した。エラスムスは中世神学の伝統にしたがい、人間を敬虔な〈霊〉と不敬虔な〈肉〉とに二分する。この人間論によれば、人間の天性は粗野であり、邪悪に走り、瀆神へと陥りがちである。しかし人間の情意がすべて不敬虔だというのではなく、魂や霊と呼ばれている部分があつて、それによつて人間は神を求め道徳的善を求めて努力する。⁽⁶⁾ ルターはこの霊肉二元論に対して次のように反駁する。人間の最も優れた部分、エラスムスの言う〈霊〉または善の種子が、実は不敬虔であり、悪に向かい、善に対して無力である。ルターによれば、〈肉〉とは自己のものだけを求める人間のありかた全体を意味しており、彼は神を求める宗教的敬虔の中にこそ「神のうちにすら自己のものを求める不敬虔」を見るのである。⁽⁷⁾

こうした人間の全体的なありかたとしての罪の本質に人間学的な視点から光をあてるために、本章では先ず、具体的な症例を通して、うつ病者の存在様式の素描を試みる。

一

症例M・K

少し古い自験例であるが、入院当時五七歳の男性で、熱心なカトリック信者である。十年来、周期的に抑うつ状態が続いていた。成人するまでの生活歴は省略する。二〇歳で大手の製造会社に入ったが、十年後に下請会社の組立工になった。本人の言葉によれば、その頃から家庭をかえりみず教会中心の生活をするようになった。四七歳のときに不況で退職やむなきに至り、季節労働者として遠隔地の原子力発電所の建設工事に出かけた。これは後々まで悔いと

して残り、「被爆者なのに原発工事に行った」と自分を責めることになった。それとともに、家計を支えることのできない自分を不甲斐なく思い、「父親として失格だ」という自責の言葉を日記に書き連ねている。半年後に、工事現場で突発的に頭痛、過呼吸などの不安発作が起こり、救急車で病院に運ばれた。出稼ぎは一年間で終わり、帰郷して別の会社で軽作業にいたが、不眠、疲労感、頭痛のために仕事を続けることができなかつた。これが発病とそれに続く初回病相期である。五〇歳の春頃から不安発作が頻繁に起こり、検査のために内科に二回入院したが、異常所見はなく、精神科に通院することになった。その時点では、不眠、食欲低下、体重減少、抑うつ気分などの症状が認められ、抑うつ神経症と診断された。第二回病相期である。薬物療法の結果、これらの症状は数カ月で軽快した。しかし、疲労感はその後も続き、職に就くことができなかつた。通院や入院はしなかつたが、病相期のくりかえしは遷延化が見られた。今回のエピソードは五七歳の一月に始まった。動悸、過呼吸、頭痛などの不安発作が連続し、それ以来、怒りっぽく、攻撃的になった。二月中旬に包丁をもって妻と息子に襲いかかり、筆者が居た病院の精神神経科に医療保護入院となった。

この患者が入院したときには、不眠と疲労感を訴えるだけで、抑うつ気分もなく、主治医に対しては丁寧な態度で愛想がよく、うつ病圏の病気を疑わせる症状はなかつた。主治医は器質性人格障害を疑ったが、検査結果を見ると、この診断にも無理があつた。口を開けば教会の話やキリシタン史の話になるので、筆者が面接することになった。筆者は、個々の症状の有無を診断の基準にするのではなく、患者の生活史に注目し、面接をくりかえしてその再構成を試みた。その結果、症状からはうかがえない典型的なうつ病親和的存在様式が浮かび上がってきた。

まず目についたのは、役割同一性が危機にさらされるたびに病相期が始まっていることである。発病の契機になった原子力発電所建設工事への出稼ぎそのものが、患者にとつては役割同一性の危機を孕んでいた。出稼ぎの理由は、長女が大学を卒業したが就職が決まらず、息子二人も在学中であったので、父親として「家計を支えるため」であった。しかし、それには、数年間つづけてきた教会の月報編集をやめなければならぬという（患者の言葉によれば）「苦痛」が伴っていた。患者M・Kは、父親としての役割と熱心な教会員としての役割のはざま、役割間葛藤に悩みながら出稼ぎに行く決意をしたのであった。それは、彼が言うには、「経済的にも、心理的にも追いつめられた、ギリギリの妥協」であった。

半年後に工事現場で最初の発作が起こり、初回病相期が始まった。それは長女の就職が決まった直後であった。出稼ぎを終えて家族のもとに帰った翌年二月に長女が結婚、その春から不安発作が頻発し、第一回の病相期が始まった。この発病状況はいずれもW・シユルテや森山公夫の言う「荷おろし」(Entlastung) 状況であるが、役割同一性という観点から見れば、その喪失を意味した。前章の症例H・Nの場合と同じく、本症例においても役割同一性の喪失が発病の誘因になったと考えられる。

その後の数年間は新しい役割同一性の探求に費やされる。息子たちも大学を卒業し、父親としての責任を果たしたえたM・Kは、使命感に燃えて教会活動に専念する。面接でいつも彼が口にしたのは次のような言葉である。「今の教会は権力におもねり小さき者を軽んじている」、「そんな教会を改革せねばならぬ」、「私は改革の種をまいている」。しかし、こうした彼の言動は他の教会員からは歓迎されなかった。さらに、教会内での地歩を回復しようとして信徒会長選挙に立候補するが、落選する。結局、教会活動に役割同一性を見いだそうとしたM・Kの努力は実を結ばぬまま

に終わり、病状は重篤ではないが遷延化する。

このような内的生活史を辿つて最後にM・Kが見いだした役割は、郷土のカトリック史の研究であつた。これは、テレンバツハやビンズブンガーが引用している患者M・B・Kの言葉を借りれば、「不安の国で道に迷つた魂が頼りにする最後に残つた道標⁹⁾」というべきものであつた。図書館で古い資料を見つけたことをきっかけに郷土史研究会に入会し、資料探索に没頭する。その結果、病状が一時軽快し、数年ぶりに求職の意欲が生まれた。やがて、自分の属する教会が創立百周年を迎えるにあつて、研究成果を自費出版で発表しようと考えに至つた。そのために銀行預金から五〇万円ほど出せないかと妻に相談したところ、「あなたの書くものなど、だれが読みますか」と全く相手にされず、長男からも「身のほど知らずだ」と厳しく批判された。これが今回の発症の直接的な誘因になつたと考えられるが、その意味するところは、ようやく手に入れた新しい役割同一性がだれからも認められず、危機にさらされた、ということである。加うるに、出版への固執と不安という役割内葛藤もあつたと思われるが、これも役割同一性危機に含めることができるであらう。

二

役割同一性の危機がうつ病の発病誘因として最も多いものの一つであることは、前章で既に述べたとおりであるが、この点についてA・クラウスは精神分裂病の発病状況と比較して、次のように指摘している。分裂病の発病にとつて特別の意味をもつのは特定の役割関係を作りあげねばならぬ状況である。これに対して、うつ病はそうした役割関係

を放棄せねばならない時に発病することが多い¹⁰⁾。役割関係を作るといふ点では、うつ病者は何ら問題がなく、それどころか極めて優れた能力を発揮する。対照的に、分裂病者にはそれができない。なぜか。この違いは、うつ病者と分裂病者における自己同一性の差異に起因する。

うつ病の場合にも、精神分裂病の場合にも、発病の誘因になるのは自己同一性危機であるが、その意味するところが全く異なる。うつ病の誘因になる自己同一性危機は役割同一性の危機であり、それが成立する根底としての自己同一性は、うつ病者においては揺るぎなく確立している。クラウスはこの役割的自己ないしノエマ的自己が成立する根底を「無」と規定する。彼の言葉をそのまま引用すれば、「われわれはある点で無であるからこそ、すべてでありうる¹¹⁾」。つまり、無であればこそ、「どんな役割もそこに入り得る¹²⁾」のであって、そうした無の場所としての自己が成立して初めて役割的自己も成立する。この無の場所としての自己を、前章で言及したとおり、ブランケンブルクは「超越論的自己」と言い、木村敏は「ノエシ的自己」と言う。ノエシ的自己は、そこにおいて、ノエマ的自己が成立するという意味では「場所」であるが、限定された場所ではなく、むしろ自発的な無限定の自己生成作用というべき営みであり、シェリング風に言えば「自己のうちの自然」あるいは「先行する暗黒」である。したがって、ノエシ的自己は、神学において「無からの創造」と言われる場合の「無」の性格を帯びている。

さて、この自己生成作用は「述語として主語を限定することによってそのつと主語的自己を成立させる自然な働き」と規定されるが、それが十全であれば、「わたしは……だ」（このブランクには、例えば役割が入る）という陳述が可能になる。すなわち、この言表に先立って、自明のこととして「わたしはわたしである」と言うことのできる「わたし」が既に成立しているので、その「わたし」を主語にして「わたしは……だ」と陳述することができるのである。

ところが、分裂病者の場合には、「わたしは……だ」と言おうとしても、それに先立つ「わたしはわたしである」というノエシスの自己の自明性が失われているので、主語としての「わたし」が成立しないためには明証性を欠くために、「わたしは……だ」という陳述そのものが不可能になる。その結果、分裂病者にとっては役割関係を作ることが難しくなる。

これに対してうつ病者はノエマ的自己すなわち主語としての「わたし」が確立しているので、「わたしは……だ」と陳述することができる。しかし、この述語の部分を空白のままにしておくことができない。この空白を常に何らかの役割で埋めようとする。それは、述語が空白のまま「わたしは……」と絶句するとしても、その主語としての「わたし」を成立させている「わたしはわたしである」こと或いは「わたしがある」ことに自足する、ということができないからである。テレンバッハがうつ病者の存在様式を「自分自身が自分の内容となることができない」⁽¹⁵⁾と定式化したのは、この事態を指している。なぜそうなのかと言えば、いったん主語的自己が成立してしまうと、ノエシスの自発性によってそのつど自己が生成するという動的構造が失われるからである。「わたしはわたしである」ことは「わたしはわたしになる」という動的な生成過程を含んでいるが、それが失われると、主語的自己は化石化する。前述のテレンバッハの患者M・B・Kは、動的な自己生成過程の消失を「石になってしまふ」と表現している。クラウドは「無であるからこそ、すべてでありうる」と言うが、自己生成過程の消失は「すべてでありうる」という「無の可能性」の消失を意味する。われわれが無の場所としての自己に自足できるのは、その無が可能性を孕んだ創造的な無だからである。その可能性が失われれば、無に耐えることはできなくなる。うつ病者やうつ病親和的な人々が無為に耐えることができぬ所以である。

うつ病者は役割同一性を失うと、ノエマ的自己が化石と化し、空無化する。その空無を満たすには、あらたな役割を探すより他はない。こうして、われわれの患者M・Kは発病以来十年間、役割同一性の喪失と探求を何度も繰り返したのである。

三

役割は対人関係の中での自己の価値であるから、うつ病ないしうつ病親和的存在様式においては他者が重要な意味をもつ。テレンバツハの患者M・B・Kは他者の支えの必要性について次のように記述している。¹⁶⁾

「冷却した宇宙のなかのこの石ころが、不安と絶望の淵に立たされた人間が、言うにいわれぬ切実な気持ちで、なんとか手の届くかぎりのすべてのものに（人間や動物や物に）必死でしがみつき、支えを求めるのは、あたりまえのことじゃありませんか」。

木村敏も、前うつ病者の「自己」にとっての重大な問題は、「自己が周辺の重要な他者によって受け容れられるか否かという点にある」と指摘している。¹⁷⁾

「他者によって受け容れられない場合、彼は絶望と自己非難のうちで氣力を喪失してしまう。他者による受容は、前うつ病者にとっては、いわば生命的要求のごときものになっている」。

患者M・Kの症例では、「周辺の重要な他者」は家族と教会であった。M・Kにとっては、実際に、家族と教会による受容が「生命的要求」であった。家族からはもともと受容されることが少なく、「教会ばかりに熱中して家庭をかえ

りみない」と非難されていた。これが発病に至る伏線になったと思われる。初回病相期が始まる直前の日記には、この非難を受けとめる形で、不甲斐ない父親だと自分を責める言葉を書き綴っている。しかし、教会では、月報の編集を任されるなど、活動ぶりが認められていた。それに応えるべく、重要な教会行事があると、時間と費用をかけてでも出稼ぎ先から帰省してそれに参加していた。ところが、初回および第二回病相期の抑うつ症状が軽快した後、定職もなかったので教会活動に専念しようとしたところ、教会の仲間から歓迎されず、迷惑がられる羽目になった。これはM・Kにとっては耐えがたい衝撃であった。面接の中でこのことに話がおよぶと、激しい感情表出を見せ、激昂したかと思うと涙を流し、こぶしを握りしめ、全身を震わせた。興奮がしずまるのにしばらくの時間を要した。その後、信徒会長選挙や長老選挙にも立候補して支持を求めるが、いずれも落選し、教会でも受容されないという絶望感を味わった。そして、最後にもう一度、だめ押しのように、家族の拒絶に直面する。すなわち、ようやく見つけた郷土のカトリック史の発掘という「役割」への理解と支援を妻に求めるが、それを全面的に否定され、長男にも「身の程をくれ」と「侮辱」される。これが引き金になって不安発作が続発し、入院に至った。

発病以前から病相期に至る患者と身近な他者との関係の変遷曲折をこのように辿ってみると、M・Kも、M・B・Kの言葉のとおり、何度も拒絶されながらも、「なんとか手の届くかぎりのすべてのものに、必死にしがみつiki」、支えを求めてきたことがわかる。痛ましいばかりである。これだけを見ると、M・Kは他者との生の共同をひたすらに求めており、それが彼の存在様式の特徴であると思われる。しかし、対人関係ないし他者との生の共同に関して、うつ病的・うつ病親和的存在様式の特質を解明するためには、もう一步先へ考察を進めなければならない。

四

テレンバッハはメランコリー親和型のうつ病者の対人関係を定式化して、「他人のために尽くす」という形で「他人のためにある」という関係だ、と規定する。¹⁸それは、他者への気づかいと献身を特徴とする生きかた、と言つてもよい。芝伸太郎は幾つかの症例を通してうつ病者の対人関係のありかたを次のようにまとめている。¹⁹

「ふだん自分と接触している周囲の人々を非常に大切に扱う。いつも、相手を傷つけまい、相手に迷惑をかけまい、相手のことを粗略には扱うまい、と細心の注意を払っている。しかもそれは決して押し付けがましいものではなく、常に相手を観察していて相手が必要としているものだけをさりげなくさつと横から差し出すといった具合の、控えめではあるが要所を押さえた見事な気配りである」。

したがって、うつ病者は周囲の人々の目には模範的な「対人関係の達人」と映る。M・Kも入院したとき、主治医に対して丁寧で愛想がよかつた。筆者との面接中も、前節で触れた一時的な感情表出以外は、不眠や食欲不振を訴えながらも笑顔を絶やさなかつた。彼の生活信条は、「殉教者を模範として、自分の生活を犠牲にしても隣人に仕える」ことであつた。

しかし、この他者との関係は義務ないし役割を果たすという形で営まれる。配偶者や子どもとの関係も「果たすべきつとめとして、普遍的規範の実現として」(マトゥセック)遂行される。²⁰これが「尽くす」ということである。テレンバッハによれば、メランコリー親和型うつ病者は、「具体的な尽力を伴わないでただ純粹に他人のためにある、というふうなありかた」は考えられず、「自分がただそこにいるだけで他の人を幸福な気持ちにしたり、喜ばれたりするこ

とができようなどという考え」は受け入れられない⁽²⁾。愛もまた、マトウセックによれば、「独自の個性をもった独立の人格を肯定することとしてではなく、相手の愛を要求しうるために必要な行為の遂行として生きられる⁽²⁾」。つまり、人格関係と言われるような関係であっても、相手に対して果たすべき役割を果たすという関係になり、自他ともに役割において見られる。いわゆる「我と汝」という関係は成立せず、対人関係は総じて、役割同一性の確立のために役割的自己と役割的他者が相互に補充し合う関係になる。約言すれば、役割交換という関係である。そして、この役割交換が終われば、それまで濃密であった関係がたちまち淡泊なものに変わる。これは多くの臨床家が指摘するところであり、筆者の臨床例でも散見する。

患者M・Kの場合には、妻との関係にこの対人関係の特質が顕著にあらわれている。彼は今回の不安発作の少し前から妻との離婚を考え始めたという。それは、郷土カトリック史を執筆して出版する企てに対して妻の反対が障害になるので、その障害をなくすためという理由によるものであった。しかし、離婚すれば「教会での信用を落とすことになる」、それを恐れて躊躇していた、ともいう。一方では、郷土カトリック史研究という新しい役割に打込む自分を妻に受容してもらいたいと必死で願いながら、それが拒絶されて役割的自己の価値や存在理由が否定されると、恐らく自己喪失の危機に対する第二の防衛戦略であろうが、一転して、妻を自己の役割同一性確立の障害として排除しようとする。しかも、それをためらう理由もまた「教会での信用失墜」という別種の役割同一性危機に対する危惧であった、最後まで自分の役割同一性に固執している。要するに、M・Kにとって妻は、自他の境界が消えるようなノエシス的な根源的経験を共有しつつ、しかも我ならぬ他者として出会う人格ではなく、単に自己の役割同一性を補完するための非人格的機能であるにすぎない。換言すれば、妻は「自己存在に対する肯定的原理」として評価されているだ

けであり、妻がその役割を果たさず、「自己存在に對する否定的原理」に転ずるならば、直ちに意味を失うのである。木村敏はこの事態を指して、「他者が自己の構成分として、真の他者性を失って自己の中に取り入れられている」と言い、それを前うつ病者およびうつ病者の「自己中心性」と呼んでいる。²⁴

以上の考察から、「他者との共生を求め、他者のために生きる」という「去私的」なうつ病者の対人関係の中核をなすのが、実は、自己中心性であることが明らかになる。他者を自己の構成分として自己の中に取り入れるのは、うつ病者の存在様式においては既に述べたように「自分自身が自分の内容になることができない」からであって、自己中心性はうつ病親和型存在様式の根本規定でもある。

(第二章未完)

付記。症例M・Kの素描を通して、うつ病者の存在様式の根本規定として「自己中心性」という概念を取り出すことにより、われわれはようやく罪の本質について論及する段階に達したが、今回は時間的制約もあり、ここで筆をとどめる。

註

(1) 拙論「罪の自覚——その人間学的構造(一)」(『基督教学研究』第一四号、一九九三年)

(2) 木村敏『自己・あいだ・時間——現象学的精神病理学』弘文堂、一九八一年。

(3) H. Tellenbach: Melancholie, 1983. (木村敏訳『メラン

- 「ロリー」みちぢ書房、一九八五年)
- (4) Erasmus: *Aetypus* sive collatio de libero arbitrio, 1524.
- (5) Luther: *De servo arbitrio*, 1525.
- (6) Erasmus: *ibid.* I, a, 10, III, b, 4.
- (7) Luther: *W. A.* 18, 694.
- (8) 森山公夫「兩極的見地に於ける躁うつ病の人間学的類型学」『精神神経誌』70巻10号、一九六八年)
- (9) H. Tellenbach: *ibid.*
- (10) I. Binswanger: *Melancholie und Manie*, 1960.
- (11) A. Kraus: *Sozialverhalten und Manischer-depressiver*, 1977. (岡本進訳『躁うつ病と対人行動』みすめ書房、一九八三年)
- (12) A. Kraus: *ibid.*
- (13) 芝伸太郎『日本人という鬱病』人文書院、一九九九年。
- (14) H. Tellenbach: *ibid.*
- (15) この点については、有賀鐵太郎の「ヤトロギマを人間学的に展開することのできるのではなからか」と考えてみる。
- (16) H. Tellenbach: *ibid.*
- (17) *ibid.*
- (18) 木村敏、前掲書。
- (19) H. Tellenbach: *ibid.*
- (20) 芝伸太郎、前掲書。
- (21) P. Matussek, Halbach u. Troeger: *Endogene Depression*, 1965.
- (22) H. Tellenbach: *ibid.*
- (23) P. Matussek, et al: *ibid.*
- (24) 例を以て、芝伸太郎、前掲書。
- (25) 木村敏、前掲書。